

ミニマルセルフという考え

福田 敦史 (Atsushi FUKUDA)

慶應義塾大学非常勤講師

この発表では、ここ数年、哲学や認知科学など（の一部）において論じられている、ミニマルセルフ (Minimal Self) という自我概念をとりあげる。Minimal Selfとは、ひとまずは「基礎的で直接的である原初的な何か。たとえ（自我に関する）非本質的な特徴がすべて剥ぎ取られたとしても、なおも自我と呼びたくなるような」ものことである。本発表の前半では、この Minimal Self というものがどのような自我概念として考えられているのかについてまず整理し、後半では、この Minimal Self という概念、とりわけ G. ストロークソンによって捉えられている Minimal Self という概念について、その可能性の条件について考察する。

実は"Minimal Self"といっても、既にして多彩な議論の文脈において取り上げられており、いろいろな論者が、それぞれに定義したり区分をほどこして用いている。錯綜した概念を解きほぐすことはそれほど簡単なことではないが、本発表において必要最小限の問題系の整理をしたいと思う。その際、大きな対立軸を二つあげて整理することになる。一つは、Minimal Self と Narrative Self との対立という軸であり、もう一つは、Minimal Self 論者内部での対立軸というものである。

当然のことながら「自我としてみなしうる必要最小限のものを備えたもの」という考えそれ自体は、決して新しいものではなく、むしろ、これまでの哲学・思想の歴史を振り返ってみても多種多様に論じられてきたといつてよいだろう。こうしたなかで、Minimal Self という概念が提示された理由には、Narrative Self という考えの興隆という背景がある。

Narrative Self という考え方では、自我というものは、自分自身の記憶を語ることや、他者からの語りなどを通して、物語として自らの存在を紡いでいき、自我として構成されていくものである、という捉え方をする。そして、しばしば、過去から現在までの統一的・統合的な物語のもとでの同一の自我、という自我像が強調される。

Minimal Self という自我概念は、こうした Narrative Self のような自我像に対して、異なる自我の在り方をうちだすため、あるいはさらに、完全なる異を唱えるために示されていると見ることができる。Narrative Self と対峙させられる Minimal Self とは、その時その時の経験の主体である限りの自我であり、時間的な延長は極度に短く（「ひとつの経験」が続くあいだ程度）、また、全体として捉えられた人間とも区別されるものである。

さて、Minimal Self という自我概念を持ち出す論者は必ずしも多くはない。しかしながら、彼（女）らのうちにあっても、共通理解のもとで Minimal Self というものが捉えられているわけではない。

例えばギャラガーは、Minimal Self のうちに、その重要な特徴として、自己所有感覚 (sense of self-ownership) というものと自己行為者性感覚 (sense of self-agency) というものを挙げる。例えば、目の前のカップに手を伸ばして取ろうとする場面であれば、「動いているのは自分の手である」という感覚が自己所有感覚であり、「その手を動かしている (すなわち行為の主体である) のは自分である」という感覚が自己行為者性感覚である。

しかし、例えば、ストローソンは Minimal Self というものに、行為者性や身体性というものを含めることに否定的である。発表者のみるところでは、ストローソンはもっともラディカルな Minimal Self を唱える論者 (かつ、もっともラディカルな反 Narrativity 論者) であると言える。本発表では、ストローソンの考える Minimal Self と他の論者の捉える Minimal Self とを対比させることで、自我とみなしうる必要最小限のものを備えたものとしての Minimal Self という概念を示したい。

ストローソンの考える Minimal Self は、1) 経験の主体 (意識的な感覚者・思考者) であり、2) ものであり、3) 心的存在であり、4) ある個別の経験が続くあいだいかなる時でも単一のものである、というような存在者である。発表の後半では、このストローソンの考える Minimal Self の最小限の要件が可能であるためには、どのようなことが必要なのか、という点について、1) の「経験の主体」という点を取りあげて検討したい。

ストローソンにとって、Minimal Self が経験の主体であるということは、端的な現象的・経験的事実であって、出発点に他ならない。それでも、経験の主体とはどういうことかと問うならば、それは、ある事柄が、自分に生じていること、自分の経験として生じているということ、すなわち経験の自己帰属とみなせるのではないか。

それでは、自己帰属という能力が可能であるためには、どのようなことが必要なのか。この問いに対して、本発表では、必要な能力の少なくとも一つが想起であると論じたい。だが、次の二つの点について注意が必要である。まず、ここでは発生論的な議論をしているのではなく、自我にとっての概念的な問題を論じているということである。また、想起ということで時間理解の必要性を想定する人もいることだろう。だが、自己帰属に必要な想起能力の本質は、時間性の理解にあるのではなく、実在 - 非実在の事柄の帰属にあるのだ、ということである。以上のことを可能な限り示したい。

主要な参考文献：

Gallagher, S. (2000) 'Philosophical conceptions of the self: Implications for cognitive science', in *Trends in Cognitive Sciences* vol.4, No1, pp. 14-21.

Schechtman, M. (2007) 'Stories, Lives, and Basic Survival: A Refinement and Defense of the Narrative View', in *Narrative and Understanding Persons*, D. H. Hutto [ed.], Cambridge University Press, pp.155-178.

Strawson, G. (2004) 'Against Narrativity', in *Ratio* 16, pp.428-52.

Zahavi, D. (2010) 'Minimal Self and Narrative Self: A Distinction in Need of Refinement', in *The Embodied Self*, T. Fuchs, H. C. Satel, and P. Henningsen [eds.], Schattauer, pp.3-11.